様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７０１６１

研究課題名（和文）古代日本語表記における音訓両仮名の標準化と衰退及びその相関についての研究

研究課題名（英文）On the correlation between "on-kana" and "kun-kana" in ancient Japanese

研究代表者
尾山　慎（Oyama, Shin）

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：２０５３５１１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：訓仮名認定の恣意性を回避するため、そもそもの文字と訓の定着度、頻用による常用化について、用例数を計測するだけではない方法を模索した。そのひとつとして、音仮名の連続中に存在する孤立的な訓仮名を追跡し、かつその字母が音（オン）としてどのように使用されるかなどを詳細に調査し、訓仮名の認定を行っていった。これにより訓仮名にも多様性があることが判明し、たとえば訓字の定着的使用が前提になるといった想定は、もちろん当然ではあるけれども、その訓字の定着度をそもそもどう計るのかということに立ち返って研究する必要性が判明した。従来の訓仮名認定および研究はこの点で更新される必要がある。

研究成果の概要（英文）：To qualify for kun - kana, counting the number of examples is not enough.It is necessary to clarify in what environment the character is used.For example, in an environment where on-kana is frequently used, study a few kun-kana Then you can see how kun-kana is established.Until now, kun-kana has been intensely studied in environments where kunji is often used. It was a matter of course, but for the first time the relationship with on-kana is clarified, the identity of kun-kana will become clear.The material has a limit. Therefore, there is no need to seek methods other than counting the number of examples like this, but this research could achieve that.

研究分野：日本語表記史

キーワード：萬葉集　訓字　訓仮名　音仮名　文字　表記

１．研究開始当初の背景

ある表記をなすときに、文字の性質を勘案し、選択し、記そうとすることを用字法と呼び、それらの文字をどのように組み合わせ、配置して一つの表記をなすかということを表記法と呼ぶ。実情は、往々にしてこの表記法が先立つ。つまり、表記法が用字法を規制している形になる（尾山慎「訓字主体表記と略音仮名」(『萬葉集研究　第三十三集』2012)。

萬葉集歌表記において使用される文字は、まず訓字と仮名をもってその対極に措くのが普通であろう。しかし、実際の表記においては二つの点で多様である。一つには、訓字と仮名の、いずれか一方だけで記されることがある場合と、両者を混交する場合とがあり、しかもその混交度合いは一様ではないということ。つまり表記法レベルでの多様性である。もう一つの多様さは、訓字、仮名という文字そのもの、用字法レベルでの多様性である。かような多様性の中にあって、仮名はどのように標準化を遂げ、あるものは衰退していくのか。よく使われるものとそうでないもの、特定語彙の表記に偏り表語性を有するもの、文脈に密接に関係するもの、様々な中にあって、仮名が果たす役割とその消長を分析する。すでに、二合仮名については奈良時代末期に向かって衰退していることを明らかにしている（尾山慎「萬葉集における子音韻尾字音仮名について」『萬葉』198 号　2007）が、単音節仮名や、あるいは訓仮名と一括されている中にもこのように衰退を見せる一群があると推定される。ただしその推移が仮名とどれほど連動的かはこれまでの研究史ではで必ずしも明らかでない。なお、単音節仮名である略音仮名については、使用頻度を高め、かつ字母数は時期を経るごとに押さえられることを既に明らかにしたが、訓仮名とどれほど対比されるかが研究の焦点の一つであった。この検証では、仮名の標準化を計る指針に、音節数（単音節と多音節）、他種字との交替、特定語彙表記への偏向などが分析ポイントとなるが、これらの考察を通じ、標準化のメカニズムを稀字母や、臨時的使用法の仮名の消長という観点からも解析する。頻出字母を取り出して、それだけを分析するのではなく、二合仮名のように、そもそも稀少であったり、あるいは衰退していく仮名の実態、要因を十分に考察することで、仮名の標準化がいかに遂げられるかを照射する。

２．研究の目的

本研究は、古代日本語表記における音訓両仮名の使用実態を検証し、訓字が支配的な環境の中で、それらはいかに標準化していき、かつ、いかに淘汰されるものであったか、その実相を明らかにするものである。検証では、仮名としての使用頻度を計るのみならず、使用頻度が高められた理由―つまり表記の特定化という観点からも検証する。各仮名がおかれる文字列の環境（訓字、義訓等がいかに混在するか）の分析から、仮名として成立している要件を探る。そして従来例外扱いをされがちであった仮名でありながら意を帯びる「表意性」を有するとみられるの用例についても、音訓両仮名におけるその実相を検証し、仮名の盛衰にどう関わっていたか、精密化するものである。

訓仮名の特徴は橋本四郎論文を筆頭に、これまでも指摘があるが、表記される語との密着性や、表意性を帯びる場合の方法を、音仮名との比較を通じて体系的に論じたものはいまだ認めがたい。報告者は略音・二合両仮名の研究を進めてきたが、訓仮名との関わりとしては多音節訓仮名と二合仮名に濃厚に認められることをすでに明らかにした。両者は機能を分け合い、棲み分けているようなところがあるのだが（『萬葉集における二合仮名と多音節訓仮名について』萬葉 207 号 2010）、二合仮名は音仮名として子音韻尾字由来として略音仮名研究に連続し、多音節訓仮名はもちろん単音節の訓仮名、そして義訓等への議論に連続する。つまり子音韻尾字音仮名という切り口は訓仮名を検証する重要な鍵であり、そしてなおかつ古代の漢字による日本語表記の研究の、様々なところへと連続しているのである。訓字と仮名を交えて書く、交え方も千差万別という中にあって、仮名の役割は何であったかということを問う上で報告者の方法論は上述の通り有効であったと考える。隆盛する仮名（略音仮名）と衰退する仮名（二合仮名）という対照的な二者の、元になる漢字は同種である。この明示的な用例をもって、訓仮名のそれを追えば、仮名がどう淘汰され、あるいは継承され、それが音訓でどのような差異があるのか、ないのか、どのように表意性と表語性を獲得していたかということをより精密に析出できる。仮名字母群の標準化とその形成を見極めるのみならず、平仮名の成立を見定めていく上でも非常に重要な指針をもたらすと考える。

３．研究の方法

初年度は、主に既発表の、萬葉集を中心とした略音仮名および二合仮名に関する分布、傾向について、これまでは個別的記述であったため、後々作成する資料等との比較検証が容易になるよう総括的論述を行う。子音韻尾字音仮名に関する未調査資料についてデータを作成し、各資料における特徴を位置づける。二合仮名については、一般語を表記した例が萬葉集にしか出てこないので、必然的に固有名詞表 記例を蒐集することになる。具体的には、日本書紀、正倉院文書、木簡、（いわゆる）「 推古朝遺文」における用例についてで、これを悉皆的に調査し、考察を加える。日本書紀は各諸本、 正倉院文書は公開データベースおよび『大日本古文書』、木簡についても公開データベースおよび『木簡概報』『木簡研究』等、推古朝遺文は『仮名源流考』（大矢透著）などを底本とする。

２年目は、訓仮名を悉皆的にデータベース化することを行う。従来、訓仮名のはっきりとした基準に基づいた字母データは十全といえるものが提出されていない。巻一の第一番歌から順に、訓仮名と明言してよさそうなもの、あるいは存疑などというように段階別にマーキングし、申請者が提唱する表意性および表語性という観点に照らしつつ個別に検証して、用例を確定させていく。なお、多音節訓仮名の検証からまずは取りかかる。この成果に照らしつつ、考察することで、後々の単音節訓仮名の検証に活かせると考える。さらに、作成した、すべての略音仮名、二合仮名各文献におけるデータを横断できるように一括し、かつその表記される語を入力し、これを分析、考察する。これらによって、仮名の反復、継承性と、逆に臨時的、孤立性がどのように現れるかを計り、どのような語の表記に専用されているか、あるいはいないかということの度数分布をとるのである。

最終年度は、以上に作成したデータによって、その表記される語（語種）、偏り、反復・継承性の有無、表意性の有無など、種々の検証項目を通し、総括的な考証を行う。中間段階での研究成果は、適宜、学会、学術論文雑誌に投稿することで、その成果を問う。

４．研究成果

本研究によって、様々なデータが得られたとともに、文字数をカウントするといった分析だけでは、見えてこないこともあるということが分かった。特に、訓仮名という分析者の解釈が介在する存在が、研究の中枢に据えられていたこともあって、かえってその問題が浮き彫りになったように思う。計画当初は、とにかくデータをつくり、それを縦横に分類していけば、精緻さが増すばかりと考えていたところがあるが、必ずしもそうではないということも明らかになった。

そこで着目したのは、表記の環境である。文字を切り分けてデータベース化し、ひたすら数値をとっていくのは、堅実ではあるが、いわば、実際の表記の現場から切り出した静態的観察である。その必要性は認める一方、動態的な分析もなされなくてはならない。よって、萬葉集歌表記における文字の用法（訓字、訓仮名、音仮名）が、文字同士の関係、環境にあってどのような張り合いのもとに存在しているかが、ということに着目すべきと考えるに至った。単に、音か訓かや、どのような文字が何例あるかだけで切り分けていく方法論は限界が見えてきたように思う。たしかに、一般に、訓仮名の認定は恣意的になりがちである。一応、訓字の意義を捨象したもの、訓字としての通用が定着していることが前提などといわれるけれども、「訓字としての定着」ということ一つをとっても、それがどのように裏付けられるかは、それだけで一つの研究方法論を構築すべきほどの問題である。報告者は、訓仮名の認定以前に、訓字としての定着、文字としての頻用・希用ということに着目した。文字のおかれる環境に着目するというのは、たとえば音仮名ばかりが並ぶ中に、一つ訓で読むべき字が交じっているというようなケースをいう。一例をあげると「安良多麻乃登之可敝流麻泥安比見祢婆許己呂毛之努尓於母保由流香聞（あらたまの　としかへるまで　あひみねば　こころもしのに　おもほゆるかも）（万葉：巻 17・3979)」のようなものである。 従来、このような例における「見」字などについて「訓仮名性を与えられているもの」などと説明がなされ、たしかに、一見すると仮名の文字列に埋没しているかのようである。しかし、そのように見えるだけであって、実際は「み（る）」と読む以外あり得ない。つまり、立派な訓字なのである。「訓仮名性」といいうのは、言い得て妙だが、しかしその認定だけでは、訓仮名の分類、考究は前進できないと考えた。そこで、報告者はこう考察した―これほど音よみの仮名が並ぶ中で、このように一字だけ訓字を紛れ込ませても、それに誤読の恐れがないという判断があった、それほどに「見」字と「み（る）」の関係は強固な紐帯を結んでいた、と。また、「見」字は「ケ」などの音仮名では使われないのだが、そのことも、上述のところに整合する事象であろう。これはほんの一例に過ぎないが、こういった方法を用いれば、「見」字が「み（る）」の文字として何例使われているか、という数値にだけ頼らなくても、複合的な判断を下すことができ、文字と語の定着度を測る一つの指針にできると考える。

このように、文字を一つ一つ切り分けるのではなくて、語の単位にも注目し、動態的に捉えていくことを明示できたと考える。繰り返し使用されるものと、必ずしもそうではないもの、当然、実態は多様であったと思う。そして、いま目に見える資料をもってしか駆られないのも事実であるが、一例であれば希少、百例であれば常用と認定していくことは、重大な見落としにつながるのではないかと思う。上記「見（み）」の例なども、決して数は多くはない。それは資料的事実である。しかし、「見」字とそれがおかれる環境、使用される動態の現場を子細に検証すれば、用例数だけが語るわけではない実相が、見えてくる。本研究はそれを示し得たと思う。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

１．<u>尾山慎</u>「万葉集仮名主体表記歌巻における単音節訓字―巻十七を中心に―」査読有り（『美夫君志』92　pp13-25　2016）

２．<u>尾山慎</u>「萬葉集「正訓」攷」査読有り（『文学史研究』56 号　pp56-67　2016）

３．尾山慎「萬葉集における用法としての文字選択とその表記―二合仮名と訓字・訓仮名の両用を巡って」査読無し『萬葉集研究』35 pp211-246　2014　塙書房）

〔学会発表〕（計１件）
１，尾山慎「萬葉集仮名主体表記歌巻における単音節訓字について－巻十七を中心に－美夫君志会 」 2015/06/28　於中京大学

〔図書〕（計１件）
１，犬飼隆編　尾山慎共著「文字と音訓の間」査読なし（『古代の文字文化』竹林舎　2017年中刊行予定、依頼論文につき掲載確定、2016年8月31日脱稿、現在校正中）

６．研究組織
(1)研究代表者
　尾山　慎（OYAMA,Shin）

奈良女子大学・研究院人文科学系・准教授

　研究者番号：20535116